

小ボール状の玩具、小さな玩具／部品の安全について（欧州規格から）

これまで、「直径 39 ミリの筒（ほぼ、トイレットペーパーの芯）に入るものは、子どもが飲み込めてしまうので危険」とされてきました。しかし、現在の欧州規格、国際規格や米国の規格では、39 ミリではなく、「45 ミリ（44.5 ミリ）」と「32 ミリ（31.7 ミリ）」の 2 つが使われています。日本でも、この数字を見るようになってきました。これまでは、単に「飲み込む」ということで一括して扱われていたハザード（危害を及ぼす可能性のある物の条件）が、種類の異なる 2 つのハザードに分けられた結果です。

下に、この 2 つの数字を解説します。「注釈」以外の内容はすべて、EN71-1:2005+A8:2009 と EN71-1:2005+A9:2009 から翻訳したものです。

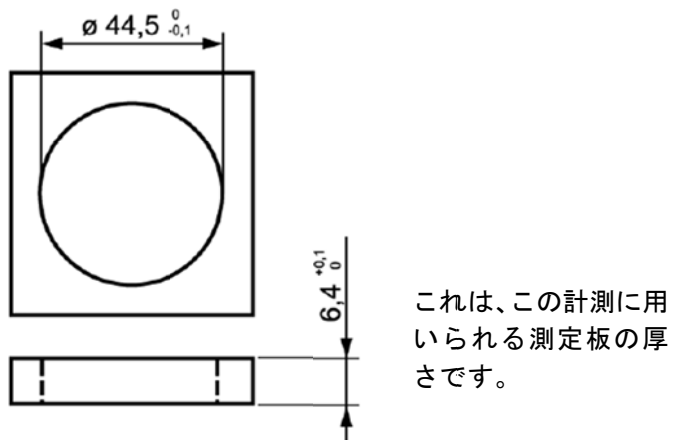
1. 小ボール状の玩具

ここでいう「小ボール」とはその玩具の用途ではありません。形として、球形、卵型、楕円のボール、または、48 面体以上の球形、卵型、楕円形をした物体を指します（注釈：つまり、必ずしも「真ん丸」ではないということです。また、おまごとの卵のように半分に分れる玩具であっても、一方の先端は球形、卵型または楕円です）。

下の定義にあてはまる玩具は、36 か月以下の子ども玩具としては適しません。（36 か月以上を対象とする場合も）危険を明示する警告を付ける必要があります。

下の大きさの穴を通り抜けるボール状のものは、すべて「小ボール状の玩具」とみなされます。他の玩具の一部であっても、とりはずしのできるもの、力を入れたり落としたりすればボール状の部分がはずれてしまうものは、「小ボール状の玩具」とみなされます。

直径 44.5（45 ミリ）の円を通りぬけるボール状の玩具は、36 か月以下の子どもに適さない。

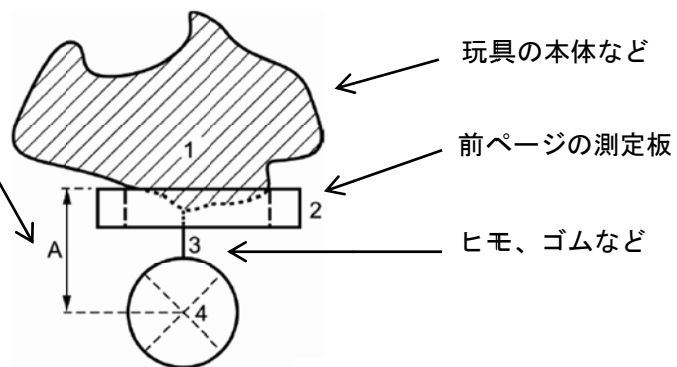


また、ヒモやゴムなどで玩具の他の部分からつながっているボール状のものも、下のよ
うに、Aの長さが30ミリを超えた場合には、単体の「小ボール状の玩具」と同等、とみな
されます。

●ヒモやゴムで、ボールの部分が必要な物（玩具の取っ手、本体等）に接続している場合
前ページと同じ測定板を使って、計測する。

- 1) ボールが付いている「他の物」が測定板の穴にひっかかった状態にしてぶら下げる。
- 2) その状態で、下図のAの長さを測る。
- 3) Aの長さが3センチ以上の場合、単体の「小ボール状の玩具」と同等にみなす。

この長さが3センチ以上
の場合、単体の小ボール
状玩具と同等とみなし、
36か月以下には不適とす
る（ヒモでつながってい
ても、口の中に入って咽
頭にはさまる可能性がある
ため）。



EN71-1:2005+A8:2009 の 73 ページ

危険である理由：こうした玩具は、口のすぐ裏側または上咽頭部をふさぎ、呼吸をできな
くする可能性があります。咽頭部の筋肉の収縮を起こす反射があるために、硬口蓋の突起
部分にはさまった物は取り除くのが非常に難しくなります。ボール状の玩具は、どの向き
でも詰まりうるため、玩具に通気用の穴を開ければよいということでもありません。

また、他の部分からヒモやゴムでつながっている場合も、ヒモやゴムが長ければ（上の
図参照）、同じように窒息を起こし得ます。下のように握る部分からヒモでつながっている
玩具も、ここで言う「小ボール状の玩具」に含まれます。



EN71-1:2005+A8:2009 の 88 ページ

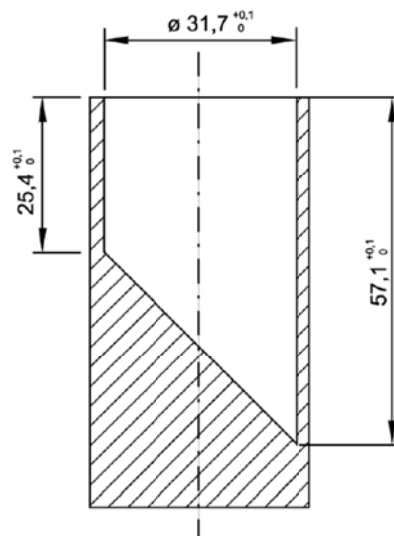
注釈：日本小児科学会の『傷害速報』47に掲載された事例は、このハザードによるもの
です。この玩具は、上の基準よりも小さいものですが、2歳児ですので飲み込む
ことはできず、上咽頭部をふさぎました。

2. 小さな玩具／部品

従来、「39 ミリ」とされてきた基準は、現在、「31.7 ミリ (32 ミリ)」、下の図のようになっています。日本で販売されている「誤飲チェッカー」を見たことがある方はおわかりと思いますが、下の図は、36 か月の子どもの口を模した筒を横から見たものです (もともとなった米国の基準がインチを使っているために、31.7 ミリという数字になっています)。

この筒に入る玩具や玩具の部品、小物は (形状、大きさ、素材にかかわらず) すべて、36 か月以下の子どもの玩具としては適しません。玩具の一部であっても、とりはずしができる、または、なんらかの場合に取れてしまう場合には同様です。(36 か月以上を対象とする場合も) 危険を明示する警告を付ける必要があります。

直径 31.7 (32 ミリ) の筒に入る玩具、部品、小物などは、36 か月以下にとって危険。



EN71-1:2005+A8:2009 の 44 ページ

危険である理由：口に入れて飲み込み、下咽頭部にはさまって窒息、あるいは誤飲 (食道側に行った場合)、誤嚥 (気道側に行った場合。窒息の可能性もある) が起こるためです。

★ ★ ★ ★ ★

注釈：上の基準は、あくまでも 36 か月をもとにしたものです。子どもが大きくなれば、口に入る大きさも飲み込む大きさも大きくなります。数字は大事ですが、数字に縛られず、保育園等ではあくまでも「今、目の前にいる子ども、子どもたち」を見ながら、数字や事例を活かしてください。(記・掛札逸美)